

創建

そうこん

2017・7・18 VOL. 52 NO. 2 (通巻164号)

巻頭言：鈴木 晃・1
 平成30年度卒業研究テーマ・2～3
 アーキテクトコース見学会・3
 アカシア教育山脈（中）：永田進・4～5
 前田工学奨励賞受賞：堀川真之・6
 郡山ヘアメイクカレッジ建設：高橋岳志・7
 建築研究会の活動報告・8
 卒業設計出展／OHDeCo巡回展・9
 新任紹介・10
 学術論文・発表論文／教室ニュース・11
 教職員名簿・12

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

◆武蔵野の本宅に夏みかんの木がある。小学校低学年のころ、縁側から種をペッと吐き出したものだ。数年前から、大量に実をつけるようになり、一昨年は1,500個ほどの豊作だった。最近ではそれをねたにして、年に一度本宅の一大イベントが举行される。小学校の同級生も含めて延べ30人近くが、ある者は高枝鉋や包丁持参で、三々五々出入りする。収穫して、搾りたての夏みかんで割った焼酎を飲みながら、ママレードをつくる。夏みかんは50年ほどで最盛期を迎えるのだそうだ。

◆現在の大学生が高齢者となる頃の日本、65歳以上が4割、75歳以上でも3割近くを占める。高齢者の住まいも大きく変わるのではないか。現在その量的不足を一部研究者から問題視されているサービス付き高齢者向け住宅。介護人材不足が進む中、それが存在し続けるのか極めて不透明だ。外国人労働力をあてにするよりも、自立支援ロボットの技術に期待する方が現実的だろう。高齢者の住宅はその技術も駆使して、「自立する場」という住まい本来の姿に立ち返る。

◆半世紀というスパンではないかもしれないが、住宅以外の建築物はさまざまな技術革新によって世の中から消えてしまう可能性がある。診療方法の転換によって病院が不要になり、情報媒体の変革で図書館がその大半の機能を失う、というのは想像できない世界ではない。住宅だけは将来とも、人類が生存する限り存在し続ける。それぞれの住宅は少なくとも半世紀ぐらいの時間を見通して建てられる必要があるだろう。

◆篠原一男作品のなかに「朝倉さんの家」（1966）がある。当初計画案は発表されたが、竣工時の図面・写真は作品集がまとめられるまで、な

ぜか未発表のままにされていた。そんなこともあって、舞台美術家・朝倉撰の家が篠原の「朝倉さんの家」であることを、私は一昨年まで知らなかった。理工学部の本杉省三先生からそれを知らされたことがきっかけで、昨年、朝倉アトリエに出向いた。朝倉は3年前に、また夫の富沢幸男も2年前に亡くなられ、アトリエ兼自宅は従前の住み手を失っていた。だがそこはまさに「生きられた家」であった。そこにある二人の人生の痕跡は圧倒的だった。その記録のため、結局三度、朝倉邸を訪れることになった。

篠原は「住宅設計の主体性」（『建築』1964.4）の中で、施主のために設計してはいけないと述べている。

半世紀という時間

教授 鈴木 晃

施主がその住宅をどう使おうが勝手だが、竣工時は建築家の作品としてその空間を自ら演出しメディアをとおして社会に持ち出すべきとする。

「虚構の空間」であり、住宅は芸術であるという主張だ。篠原作品を評論し、その写真を撮影した多木浩二は『生きられた家』（1984、青土社）で、住むということの本質、住み手と住まいの相互性、住宅のなかの時間の問題を論じた。私が建築家を志すきっかけとなった篠原の「虚構の空間」は、ちょうど50年という時を経て、そうなれなかった私の前に「生きられた家」に姿を変えて現れたのだ。すべての登場人物が居なくなったが、住宅だけが50年という時間のかたちにして存在している。

ちなみに篠原が存命中は、その鉄

壁のガードによって実像が世に流出することはほとんどなかった。没後はそのタガは緩みはじめた。旧篠原研の方々は、恩師の「虚構の空間」の実像が世に出ることを嘆き憤っている様子だ。「生きられた家」の私の記録は、そういった事情もあって世に出せない。

◆信州に妻の祖父が建てた山荘がある。叔母が引き継ぎ丁寧に管理してきた。その叔母も80歳を超え、その思いどおりにはできなくなった。工学部にお世話になる前年は勤務すべき場所もなかったのも、私が管理人を買って出た。春から秋までかなりのときをそこで過ごした。近所にペンションがあり、居心地のよい食堂で丁寧な料理が提供されるので、一人でもよく出かけた。本宅の夏みかんを大量かつ丁寧に消費してくださるという間柄でもある。

今春、そのペンションの主人から連絡を頂戴した。「杉本さんという方からの突然の電話で『近所に〇〇邸という古い別荘はないか』という問い合わせだったが、これはそちらのことではないか」というものだ。杉本茂さんは東京家政学院大学名誉教授で、中原暢子（林雅子・山田初枝と設計同人を主宰）の遺作の整理をされているという。その作業中当地に計画案（1961）が存在したことを見出した。グーグル・マップで住宅の存在は確認したのだが、それが中原作品なのかまでは分からない。それで近所のペンションに問い合わせたのだ。祖母から叔母へと丁寧に住みつないできた愛着のある山荘（1964）。なぜ中原に依頼されたのか分からずじまいだが、突然の話題は叔母を含め私たちにこの家にまつわる50年を呼び覚ました。退職後は管理人業務に専念しようかと思って

平成30年度 卒業研究テーマ一覧

建築ゼミナールを受講する学生は、ここに記載されている卒業研究テーマを参照のうえ、所属する研究室を選択しましょう。
*平成29年7月現在の情報

計画・環境系

■歴史・意匠

速水清孝教授〔論文・設計〕

山岸吉弘助教〔論文・設計〕

建築歴史意匠研究室

1. 建築・都市の歴史に関する研究
2. 建築・町並みの保存と活用に関する研究
3. 建築技術の歴史に関する研究
4. 大工の技術と組織に関する研究
5. 建築家の作家論に関する研究
6. 建築技術者の人物史に関する研究
7. 建築家を中心とする建築技術者の職能と法制に関する研究

〔設計〕持続可能な社会に向けた建築の提案、または「歴史」という発想を踏まえた建築や都市へのアプローチ

■建築計画・設計

渡部和生特任教授〔設計〕

空間デザイン研究室

1. 近代建築の空間デザインの再考
2. 設計デザインのタイプ別考察
3. これからの現代建築の展開の考察
4. 実際の建物を見ながら空間デザインを確認する

浦部智義准教授〔論文・設計〕

建築計画研究室

1. 劇場・コンサートホールに関する多角的な研究
2. 文化・医療など施設計画・評価に関する研究
3. 農村舞台など地域資源の役割・活用に関する研究
4. 建築・都市における空間知覚・認知に関する研究
5. 二地域居住や中山間居住に関する研究
6. 構法も含めた環境デザイン・パッシブ建築に関する研究
7. 震災後の復興・復興住宅・まちづくりに関する研究

〔設計〕社会的効果・計画手法・空間演出など何らかの説得力のある提案

市岡綾子専任講師〔論文・設計〕

住環境計画研究室

1. 居住空間、住環境、子育て環境に関する研究
2. 学校施設、学習環境に関する研究
3. 子どもを中心とした環境行動に関する研究
4. 地域におけるまち資源の活用に関する研究
5. 福島県の居住環境・復興まちづくりに関する研究
6. 地域との協働によるまちづくり（須賀川市など）

宮崎渉助教〔論文・設計〕

福祉居住計画研究室

1. 温泉街のまちづくりに関する研究
2. 農・漁村のまちづくりに関する研究
3. 高齢者の避難行動とまちづくりに関する研究
4. UDマトリックスをベースとした温泉街のユニバーサルデザインに関する研究

〔設計〕人間の居住空間である都市環境を秩序立て理解し、設計提案をする。

■環境工学・設備

濱田幸雄教授〔論文〕

環境工学研究室

1. 高機能遮音木床の開発
2. 風車音の測定法に関する研究
3. 風力発電施設からの騒音伝搬モデルの構築
4. 床衝撃音の評価方法に関する研究
5. 集合住宅の遮音性能水準に関する研究

森山修治教授〔論文・設計〕

環境設備・防災研究室

1. 病院や住宅の省エネルギーと災害時の生活継続計画の研究
2. 古民家や歴史的建造物の防災と保護に関する研究
3. 古民家の居住快適性に関する研究
4. 浜通り地域の津波避難計画に関する研究
5. 木質内装教室の温熱環境評価に関する研究

構造・材料系

■材 料

出村克宣教授〔論文〕

齋藤俊克専任講師〔論文〕

建築材料学研究室

1. ポーラスコンクリートの性能評価
2. ポリマーセメントモルタルの性能評価法
3. 補修用ポリマーセメントモルタルの耐久性
4. 竹補強コンクリート・モルタルの開発
5. 鉄筋コンクリート構造物の補修システムの開発
6. 高耐久性塗料の性能評価

サンジェイ・パリーク 准教授〔論文〕

鉄筋コンクリート（R C）構造・材料研究室

1. 自己治癒・自己修復機能を有するコンクリートの開発
2. R C構造物の耐久性改善による長寿命化に関する研究
3. 建築材料の防火性能とその改良について研究
4. フライアッシュ・焼却灰（溶融スラグ）の土木・建築用コンクリート二次製品に再利用に関する研究開発
5. 放射能による汚染物格納のため超重量・遮蔽コンクリートの研究開発
6. ジオポリマー（セメント使用しない）コンクリートの開発
7. 高強度コンクリートおよび高強度鉄筋を用いたR C構造物の接合部の実験・解析に関する研究
8. インド住宅用の省エネ新構法や歴史的石造建造物調査・保存の研究

■構 造

浅里和茂教授〔論文〕

堀川真之助教〔論文〕

鋼構造デザイン研究室

1. 応答解析による鉄骨骨組の地震時挙動に関する研究
2. 高層R C造建物の長期挙動評価に関する解析的研究
3. クリープを考慮したR C柱の短期挙動評価に関する研究
4. ガセットプレートの終局耐力に関する実験的研究
5. 鋼構造接合部ディテール改修のためのF E M解析
6. 福島県内公共建築物の耐震データベース作成に関する研究

千葉 正 裕 教授〔論文〕

日比野 巧 助教〔論文〕

振動システム研究室

1. 耐震補強効果の評価手法に関する研究
2. 細長い平面形を有する建物の立体振動性状に関する研究
3. 建物の近似立体振動解析法に関する研究
4. 情報研究棟およびその周辺地盤における地震動観測
5. 郡山市域の地盤および建物の振動性状に関する研究
6. 建物・杭・地盤連成振動系解析に関する研究
7. 各種構造解析プログラムの開発

G・ブントラ・ステンリー 教授〔論文〕

コンピュータシミュレーション応用力学研究室

1. 自然現象や生物の行動的なアルゴリズムを利用した建築構造物の最適化に関する研究
2. 無重力状態で自己釣り合い・自己展開できる建築構造物（テンセグリティ）の研究

3. 大地震時、建築物と基礎（地盤）の相互作用による地盤沈下防止・液状化対策・免震効果の研究

4. BIM（Building Information Modeling）による建築構造デザイン

野 内 英 治 准教授〔論文〕

空間構造システム研究室

1. 空間構造に関する研究
2. 構造物の非線形解析に関する研究
3. 木質構造に関する研究
4. 構造物の崩壊解析に関する研究
5. 各種プログラミング言語を用いた構造解析ソフトウェアの開発
6. 耐震設計法に関する調査・研究

アーキテクトコース見学会

先達の建築に学んで課題設計に臨む

3年次生 小 澤 巧

今回の設計演習課題である美術館・図書館を踏まえ、5月18日、授業の一環として福島県立美術館と県立図書館の見学会が行われた。美術館は先月から出身地三春で巡回展が開催されている建築家大高正人の作品であり、1984年に開館した。一方、図書館は石本建築事務所の設計で同時期に開館した。二つの建築は渡り廊下でつながり、機械室・レストランを共用していた。まず気づいたのは建築の見せ方である。新緑の信夫山を背景とし、レンガタイルなど使用、素材や色を統一した二つの建築は美しく雄大な景観を形成していた。内部に入るとエントランスホールはミラーガラスを通して光をやさしく採り入れ、列柱を照らし、教会のような雰囲気であった。特に参考になったのは展示室と収蔵庫である。常設展示室はこの館独自の空間であるが、企画展示室はフラットな天井をやや低く抑えることで室温湿度調整を容易にし、借り物である作品を良好な状態に保ち、壁を可動とすることで作品に応じて部屋の大きさを変えられるということがわかり、自分のプランに生かそうと思った。また収蔵庫と展示室間の動線は短く、スタッフの労力の軽減していた。そして収蔵庫前には温湿度慣らしのための一時保管庫があり、サービスエントランスの二重扉はトラックによる直接搬入を可能にし、セキュリティを確保していた。美術品には様々な配慮が必要であることを学んだ。

次に図書館へは渡り廊下を通して移動した。公開図書室は一体的大空間で、驚いたことに南側は全面ガラス張

りになっていた。フィルムコーティングにより紫外線から本を守っていることを知り、自分の設計において、ガラス壁も検討しようと思った。閉架書庫は図書室直下の半地下部分にあり、部門カウンターとは各階段で直結しサービスを行っていた。書架は上部をつなぎ、地震の揺れを軽減し、本の落下を防止していた。図書空間にも心地よく読書をするため多くの留意すべき点があった。

今回の見学では一般利用者が立入りできない舞台裏まで見せていただき、運営管理者のお話を伺う貴重な経験であった。設計段階で想定できなかった問題も様々な工夫をしながら、使いこなしていることを理解できた。課題設計に留まらず、今後の設計に役立つ多くのことを学ぶことができたと思う。



福島県立美術館の学芸員による展示室の説明

アカシア教育山脈（中） －工学部（建築学科）を支えた校友教員－

前 土木工学科特任教授（建築22回） 永 田 進

■関東・甲信越編

「日光を見ずして結構というなかれ」といわれる日光東照宮は、やはり日本建築の特質を持つ一つの代表作であるといえよう。その東照宮を有する栃木県からは、隣接県という環境から多くの校友を生んでいる。その代表とも言えるのは「建築士資格合格者数日本一」の専門学校、日建学院・日建工科専門学校や建築系専門書籍に定評ある建築資料研究社を一代で育て上げた馬場瑛八郎（9回）である。馬場は伝統校宇都宮工の出身、校友の多くが資格取得の為、お世話になっている。残念ながら昨年12月（平成28年）逝去された。合掌。馬場に続くのが今市高出身の大根田守（22回）である。今市工、真岡工を経て伝統校宇都宮工で定年。建築教育一途で大きな業績を残され、常に母校の発展に思いをめぐらしていただいていた。若手では群馬県立桐生工高出身の山口廣訓（49回）が。山口は卒業後足利工大大学院に進学、修了後は同大附属高校に赴任。温厚な人柄と研究熱心、きめ細やかな指導は生徒から絶大な信頼を寄せられている。なお教育という面では直接的な結びつきはないが、総務大臣、国家公安委員長はじめ国の要職を務め現在衆議院運営委員長という責任ある国政の立場で活躍されている佐藤勉（土23回）は壬生高出身。在学中は村田吉晴先生（元土木工）にお世話になり、国の重鎮も恩師の村田先生には頭が上がりないと言うが、常に母校や校友の為に気を配っていただいている。

水郡線で郡山とは縁の深い茨城県である。その茨城県といえば、熱い思いで工学部を永年応援していただいている伝統校であり県内工高の中心校である水戸工高校長の宇佐美浩（機30回）を抜きにしては語れない。宇佐美は卒業後、高萩工（現、高萩清松高）に赴任。その後、勝田工、玉造工に。玉造工では教諭、教務主任、教頭、校長と昇進、校内では誰よりも校内事情に精通しており“玉工の生き辞引”と言われた。今春、創立110年を迎える全国でも屈指の実績を誇る伝統校に御栄転、従来、県教委の行政職経験者の指定席である同校の校長に現場一途の宇佐美が就任したことは異例であった。これも永年工業教育に全身全霊で立ち向かって来た姿勢が評価されたというのが周囲の声である。県スキー連盟の理事長も務め、玉造工時代、往復60kmを週に何回かは自転車で通勤したという堅固な体のスポーツマンである。県内工高のリーダーとして経歴・業績から宇佐美に期待する声は大きい。宇佐美に続くと期待されたのが今尉（工化33回）であった。今は附属山形高から入学、卒業後は茨城県の高校教員に採用され、県教委等をへて、土浦工高の教頭に。平成27年5月突然病魔のため逝去された。前年12月の学術研究報告会には御元気な姿で発表され、今後の教育界を背負う人材として嘱望されていただけに惜しみても余りあるものがある。

上州群馬県からは毎年多くの入学生がいる。これも高崎工・前橋工・桐生工の伝統校を中心に多くの校友教員の存在が一つの要因であろう。峯川一郎（土24回）は、赤城山の麓、創立100周年を迎える伝統校・利根実業高の出身。卒業後、高校教員の道へ、県教育委員会から吾妻高、渋川工高の校長を歴任して満を期して母校の利根実業高の校長へ。OB校長として「日本一の実業高校を目指して」と持前の情熱をふりしぼり、後輩である生徒を奮い立たせ教員と地域社会と手を携え、夢を実現させ

た。永い間工学部とのパイプが途切れた同校であったが、峯川の校長就任後、工学部の教育や実績を自ら生徒に論じ、優秀な生徒を送り出しパイプの再建に御尽力をいただいた。入学した学生も恩師であり、先輩でもある峯川の期待通り。平成27年3月惜しまれながら定年のため退職されたが、現在明和短大の教職課程教授として地域的高等教育に奮闘されている。峯川の後任は奇しくも後輩にあたる横手静夫（土30回）である。横手も先輩校長の後継者として伝統校を支えている。そして永い間工学部を応援して一昨年定年退職された小島正己（26回）の存在も大きい。小島は進学校高崎高の出身、卒業時教員採用試験に建築部門がなかったため、小学校教員をへて工業教員に。この短い間ではあるが義務教育に従事できたことが、その後の教職人生に貴重な経験となったと述懐されている。定年後も再任用教諭として奮闘されている。

小島に続くのが、大澤武志（30回）。大澤は校友会教員部会の前身、アカシア建築教育研究会設立時に大きな力をいただいた。現在は、体の不自由な生徒の為に特別支援学校で情熱を捧げている。伝統校前橋工には石井直樹（33回）、宮下清（土31回）が。太田工には進路指導主事の重責にある吉田浩己（機31回）が。民間企業からの転進の吉田の存在は工高進路指導にはかけがえのない存在である。熱い思いで母校を支えている存在は頭がさがる。これら先輩諸氏に続く若手が桐生工高の宮崎拓也（土49回）。宮崎は卒業後、群馬大大学院へ、修了後は郷里の群馬県で高校教員の道を考えたが土木の募集がなかった為、当時、教職教室で情熱を持って教育にあたっていた故村田邦子教授の奔走で新潟県を受験。当時、新潟県教育委員会には先輩でもある久保田幸正（19回）が高校教育担当として在職、久保田の親味なるアドバイスが実り見事合格。新潟工高に赴任。その後、上越総合技術高に異動、持ち前の情熱で教科指導、生徒指導にあたり、大きな業績を打ち立てた。その後、郷里群馬県での土木教員募集の再開があり受験、合格し桐生工高に赴任。青春真盛りの10年の新潟県での教員生活は、工学部の諸先輩のバックアップのお陰であり、久保田をはじめ、横尾聡（28回）、渡邊太一（土39回）との出会いこそが今日の自分があると言う。また、毎年工学部学術研究報告会の教育部門において日頃の教育実践の成果を発表し自己研鑽に務めている姿は、校友教員にとっても大きな励みである。その宮崎の桐生工高には、同校出身の上石賢一（43回）が全国製図コンクール等で毎年優秀な成績を誇る伝統の重責を荷い奮闘中。

風土的にお米の国であり、農の国である新潟県は冬の自然の厳しさから、一に辛抱、二にも忍耐で県民性が養われてきた。校友教員は建築のみならず土木・機械・電気等多数輩出し工業高校を中心に高校教育を牽引して来た。その中心は、体育会剣道部OBである久保田幸正（19回）であるのは万人が認めるところである。久保田は御尊父の影響で卒業後教職の道へ。上越総合技術高（旧高田工）で出発し、その後、教頭職、県教委をへて塩沢商工高や、明治36（1903）年創立の歴史と伝統を誇る長岡工高の校長を歴任。常に新潟県の工業教育の中心にあり、工業高校の活性化に大きな貢献をされた。久保田の県教委、校長在職中は時あたかも、全国的に工高にとって厳しい風が吹いている時でもあり、その再生発展のため全国の工高が一致して奮闘している時であった。

今日工高が高校教育の中で、将来のスペシャリスト養成のための教育機関として着実に成果を出しているのも久保田の工業教育の指導者としての実績の賜である。このような実績の反面、久保田は校友教員として常に工学部の発展に大きな力を与えていただいていた。後輩教員の育成はもとより、教職課程における講演にもお出でいただき後輩に大きなエールをいただいた。長岡工退職後は、新潟工科大をへて現在は剣道を通じて地域の青少年健全育成に力を注ぎ、校友会教員部会の新潟県支部長としても後輩の為に奮闘している。

その久保田と共に新潟県を中心に活躍されてきたのが油浅耕三（14回）である。油浅は高校教員の経歴こそないが、校友教員のために多くの貢献をいただいた。油浅は鳥取工高から第二工学部（現、工学部）へ、母校愛は誰にも負けないと、出身大学を問われると「日本大学第二工学部」と第二工学部に大きな愛着を持っておられる。卒業後名古屋工科大学へ、修了後は工学部助手、名工大、岐阜高専を経て新設の新潟工科大教授に。一貫して後輩の校友教員を支援、現在新潟工科大名誉教授。

前述の久保田の高田工（現、上越総合技術高）時代の教え子であるのが横尾聡（28回）。担任の久保田の推薦で工学部へ、大学院修了後は東京の専門学校を経て郷里の伝統校新潟工高へ、新発田南高、母校の上越総合技術高に。学部、大学院を通して工学部の草創期から今日の建築学科を育て上げた故倉田博元教授門下生。現在、進路指導主事として多忙な毎日であるが、教員部会新潟支部事務局長として恩師久保田を支え工学部に大きなエールを送っている。その横尾と主に、新潟県から優秀な生徒を母校に送っていただいているのが新潟工高の渡邊太一（土39回）。教科指導はもちろん柔道部監督として部活動、生徒指導にも生徒に真正面からあたる姿は生徒の大きな信頼を得ている。母校に在職している渡邊は横尾に次ぐ次代の新潟県の工業教育を背負う人材である。若手では、新潟工出身の小林孝至（57回）が。卒業後は上越教育大大学院へ、修了後、東京学館新潟高に採用され数学教員として奮闘している。久保田、油浅が蒔いた種は着実に実り、花を咲かせている。

東京、埼玉、千葉、神奈川県は首都圏では、松下信禎（42回）、田中和夫（46回）が中堅教員として奮闘中。松下は民間企業を経て葛西工高に、その後、総合工科高（旧、世田谷工高）から都教育委員会へ。一級建築士、博士（工学）を持つ学究肌であるが、温厚な性格と生徒想いであり周囲の信頼は厚い。現在学校経営支援主事として教育行政に携わっているが、将来の都教育界を背負う人材である。田中も松下同じく優れた実績を持ち、現在田無工高主幹教諭として活躍。日本建築学会の工高建築教育WG主査としても工高建築教育の将来を研究されている。

千葉工高校長には鈴木賢二（機28回）が関東地区工高校長会長の要職に。すでに退職されたが金井文夫（機23回）が浦和工高、美入昌男（機24回）が川口青陵高の校長をそれぞれ歴任し工高教育に大きな足跡を残された。

棟方克夫（工化26回）は、民間企業を経て高校教員に、県教育委員会等を経て川崎工高（現、川崎工科高）校長に。関東地区工高校長会長や全国工高校長会理事長等を通して今日の工高躍進の原動力となった。文部科学省の委員等も歴任したので全国の情報にも明るい。磯子工高を最後に退職されたが、母校にも優秀な生徒を送り出し、現在教職課程客員教授として後輩に育成に余念がない。学生も先輩でもある棟方に大きな信頼を寄せている。故村田教授が熱心に取り組んだ工学部教職の活性化に棟方に期待する声は大きい。

■北陸編

富山県は、明治27年開校の伝統校高岡工芸高校の生き辞引と言われた宮浦弘義（6回）が副校長を最後に退職。

富山県の工業教育振興に大きな業績を残された。平成9年の校友会教育部会の前身アカシア教育研究会設立総会には富山から駆けつけ、御支援をいただいた。

石川県は伝統校金沢市立工高出身の元応援団団長の浦憲親（18回）が、大学院修了後開学間もない金沢工大に赴任。高校教員が薦める大学のトップクラス、教育力日本一…等マスコミでも話題に常にされる大学に育て上げた功労者の一人である。教育研究に在学時代と変わらぬ情熱で奮闘し、校友教員の多くも進学指導の面でご指導をいただいた。今春定年のため御退職。その浦の母校である金沢市立工高の校長は小酒正明（30回）、民間企業から請われて母校羽咋工高の教員に転身。卓越した業績が評価され校長に昇格、大規模校であり伝統校の難しい舵取りを見事にこなしている。浦も小酒の要請で学校評議員として母校や後輩小酒のため応援している。

アルプスの麓、山紫水明の長野県は「信州教育」という名の通り教育県としても著名。共に100余年の伝統校中野実業高と中野高校を統合し発足した中野立志館高には、OB校長として、田村浩啓（土29回）が地域や卒業生の期待を一心に集め奮闘中。田村は東京大学生産技術研究所勤務を経て郷里の教育の為に請われて長野工高に赴任。上田千曲高他幾つかの学校を経験。池田工高で校長に昇格。地域の学校に対する熱い要望のある伝統校特有の困難な学校運営を見事に軌道に乗せ、期待に応えた。満を期して平成28年4月母校の伝統を引き継ぐ中野立志館高校へ、地域の学校として田村への地元の期待は大きい。田村の郷里の学校での業績は万人が認めるところであるが、母校工学部への熱い思いも大きい。平成27年開催した「校友校長の集い」では、その熱い熱い思いを述べた。それが縁で、教職課程改善の動きが進行された。また田村自身、工業と数学の教員免許状を取得した為、教育委員会からは重宝がられ、又自分自身工業教育のみならず幅広く高校教育を見つめ経験できたという。「信州教育」の田村への期待は大きい。

その田村の池田工高時代、後輩として校長を支えたのが伊藤満（30回）。伊藤は本年100周年を迎える上田千曲高から工学部へ。卒業後池田工高へ赴任、長野工、飯田長姫（現、飯田OIDE長姫高）を経て奇しくも初任地の池田工高へ。建築科長の立場で校長を補佐し学校躍進の原動力となった。田村同様母校への思いは大きい。

若手では松本工高に小林邦之（電52回）が、長野工高からの入学で、卒業後、武蔵工大二高（現、東京都市大塩尻高）を経て、県立学校採用。研究熱心で、教科指導はもちろん部活動、生徒指導面でも卓越した指導力を発揮、将来の工高を背負う若きホープである。

そして長野県では忘れてはならない校友教員がおられた。横山賢司（36回）は、春の選抜高校野球で小さな大投手と言われた光沢穀を擁して全国優勝を成し遂げた飯田長姫高校（現、飯田OIDE長姫高）の出身。同校は元建築学科主任の故足立和夫教授が若きし頃、建築科長として教鞭を取られた学校であり、長い間多くの生徒が工学部に入学して来た。横山もその一人であり、足立研究室で先生の指導を受け、優秀な成績で卒業、教職の道に進んだ。木曽山林高（現、木曽青峰高）を経て母校に赴任。周囲の期待通り、若さと情熱でまたたく間に生徒の心をつかみ実績を打ち立てた。しかしながら平成21年8月1日、ご両親奥様4人のお子様を残され病魔の為、遠く銀河の彼方に行かれてしまった。灼熱の中の御葬儀には先生を慕う多くの人で溢れ、その御恩に報いた。前年の秋、残り少ない人生を悟ったのか御尊父の運転する車で母校を訪ねる会に参加、又亡くなる直前まで気力をふりしぼって教壇に立たれていたことは、今でも多くの人に語り継がれており涙をぬぐうことはできない。常に「横山先生がおられたなら」という声が聞かれる程、惜しみて余りある人材を失った口惜しさが残るばかりである。

堀川真之助教 第14回 前田記念工学振興財団 山田一字賞受賞

この賞は、過去3か年に国内の大学院において博士の学位を取得した土木・建築系の論文を対象に、応募論文の中から新規性・独創性に富み将来有用性が期待できる論文に対し表彰されるものである。

山田一字賞を受賞して

堀 川 真 之

この度、博士論文に対して、公益財団法人前田記念工学振興財団より山田一字（かずえい）賞をいただきました。この論文は、修士・博士課程在籍時の研究成果をとりまとめたもので、高強度コンクリートの時間依存性が高強度鉄筋コンクリート柱の短期性能にどのような影響を及ぼすのかを解析的に検証・検討した点が特徴です。紙面の都合上、ここでは受賞した研究テーマにたどり着くまでの経緯を中心にお話したいと思います。

この研究を始めたきっかけは、土木分野で活躍されている前川教授のグループが発表した著書「Modelling of Concrete Performance; K.Maekawa, R.Chaube, T.Kishi」を読んだことが1つのきっかけです。この本の中では、コンクリート構造物を対象に寿命に至るまでの安全性能を逐次把握することを目的として、時間軸に沿ったコンクリートの形成・損傷・変成過程を追跡可能なシミュレーションシステムが開発されています。高速道路や橋梁などのインフラ施設（土木施設）の寿命はその構造的な性能と密接に関連していることが多く、本システムが社会に果たす役割は非常に大きいと言えます。本書を契機に、私はコンクリート構造物のライフスパン・シミュレーションに興味を持ち、建築分野に展開できないものかと考え始めました。まずは、既往の論文を読みあさり、また、様々な場面でご指導くださった先生方※と議論を交わす日々が始まりました。

調査研究を進める内に、高層RC造集合住宅に関して、国交省から修繕積立金に関するガイドラインが発行されていることを知りました。ここでは、将来予想される修繕工事を盛り込んだ修繕計画の策定を通じて適切な修繕積立金を設定することの重要性が指摘されています。将来的な劣化を見込み修繕計画を策定するためには、建物の構造的寿命を適切に評価するとともに、実際に寿命を迎えた時の対策についても議論を行うことが重要だと考えます。とりわけ寿命に直面した際、建替えをするのか、補修・補強による更新を選択するのか、居住者や管理者が重大な判断を迫られることは間違いありません。また、相当の費用負担が予想されるため、慎重な判断が求められるものと考えられます。そのため、様々な情報に基づ

く精密な分析によって判断が下されるべきではありますが、高層RC造建物の経年に伴う性能低下ならびにそれを考慮した地震等の外乱に対する短期性能を把握することは現状では難しく、その試みも極めて少ないと言わざるを得ません。このような背景から、速やかに高層RC造建物の耐久性能、とりわけ施工から経年によって生じる長期挙動の適切な評価に基づく短期性能評価手法の開発を進めることが重要かつ緊急課題であろうとの結論に至りました。

主要な研究成果は、①高強度RC柱の若材齢期から長期、短期荷重時を経て終局時に至るまでの弾塑性挙動を統一的に解析する手法を開発したこと、②その有効性を検証した事です。また、③長期軸力によるクリープ変形が柱の耐力低下を顕著に引き起こすことを明らかにしました。このような点が評価された事は、今後研究を進めるにあたりこの上ない励みになりました。



<授賞式の様子>

岡村甫先生（前田記念工学振興財団理事長、東京大学名誉教授）から筆者に賞状と記念品が授与された。



<研究紹介の様子>

受賞式後、研究成果についてプレゼンテーションをする筆者（写真右）。当日は、受賞者1人あたり10分間の時間が与えられた。

※白井伸明先生（主査、日本大学名誉教授）、中田善久先生（副査、日大理工学部建築学科教授）、長沼一洋先生（副査、日大理工学部建築学科教授）、榎田吉弘先生（副査、日大理工学部建築学科特任教授、宇都宮大学名誉教授）、青山博之先生（東京大学名誉教授、元日大理工学研究所教授）、安達洋先生（日本大学名誉教授）、中西三和先生（日大理工学部海洋建築工学科特任教授）、北嶋圭二先生（日大理工学部海洋建築工学科教授）、神田亮先生（日大生産工学部建築工学科教授）、渡部憲先生（東海大学建築学科教授）、田嶋和樹先生（日大理工学部建築学科准教授）。ここに記して改めて感謝申し上げます。

建築計画を通じてのものづくりと日大工学部のネットワークについて

非常勤講師 高橋 岳 志 (47回卒)

■CLT壁パネル+木造ラーメン構造による美容系専門学校

今春、安積永盛駅近くに美容系専門学校の郡山ヘアメイクカレッジが移転新築、開校しました。株式会社高橋岳志建築設計事務所とエーユーエム構造設計株式会社（代表取締役／濱尾博文（28回卒）、秋山暁子（50回卒）、阿部智史（58回卒）、桑名崇裕（56回卒））の設計共同体が設計・監理を行った計画です。新築された校舎は、2016年に建築基準法に基づく告示が公布・施行されたCLTを用いた建築物の一般的な設計法と木造ラーメン構造の複合構造を用いた最新の工法を用いて建設された全国的にも注目度の高い計画で、日大工学部の先生、多くの日大工学部OBに協力を頂き完成しました。

郡山ヘアメイクカレッジ建築概要

用途／美容系専門学校
面積／1F：934.90㎡ 2F：512.72㎡ 延床面積：1447.62㎡
工期／平成28年9月～平成29年3月
構造／木造（CLT壁パネル構造+木造ラーメン構造）+RC壁構造

■ものづくりのネットワーク

建築を含む“ものづくり”は、様々な職能、多くの人々のネットワークが形成されることで形になります。CLTという施工事例が少ない工法を使った本計画では、より複雑なネットワークになりました。建築設計の基本的な3つのネットワーク、意匠設計、構造設計、設備設計に加えて、CMコンサルタント、照明デザイン、実証実験、高度な施工計画、CLTの現場監理、学校運営サポート、コストマネジメントなど、通常よりも広範囲、複雑なネットワークがあって初めて成立した計画でした。以下に本計画でネットワークに参加された日大工学部関係者の業務の一部について説明します。

■日大工学部のネットワーク

CMについては：建築計画を行う場合、プロジェクト管理についても意匠設計事務所が中心になる場合があります。しかし、今回のプロジェクトは学校運営サポート、実証実験、設計、施工、コストマネジメントなど業務が多岐に渡り、他の業務との連携も複雑になるため、プロジェクト管理についてCM業務を行う株式会社まちもり（代表取締役／濱尾博文（28回卒）、高橋大悟（65回卒））が加わりました。CMはconstruction managementの略で建設プロジェクトにおいて中立的に全体を調整、目的に向かって円滑に建設を進める業務です。

構造については：本計画で最も特徴的なのはCLTを構造材として使用している点です。CLTはCross Laminated Timberの略で、板の層を各層で互いに直交するように積層接着した厚型パネルのことを呼びます。断熱性に優れ、大判のパネルとして利用することで、高い耐震性を確保することができます。また、板の幅や厚みが多様で、幅広く活用できるというメリットもあります。

2016年に建築基準法でCLTについて

明文化されましたが、CLTを梁と一体化させた屋根板として使う事、木造ラーメン構造と複合させて使う事など、発展的利用をするために実験を行いデータ取得が必要でした。リブ付CLT屋根パネル及び建築物全体の技術評価を日大工学部建築学科／浅里和茂教授、堀川真之助教、CLT壁パネルの性能試験及び技術評価について野内英治准教授に協力頂き、そのデータを元に建築確認申請を取りました。

性能・コストについては：施工事例の少ないCLTを構造材として使用するにあたり、教育施設としての性能が担保されるかという点について、音響に関するデータやコストについても検証する必要性がありました。音響性能に関する検討については日大工学部建築学科／濱田幸雄教授、ライフサイクルコスト比較について森山修治教授にお願いしました。音響性能については、室内騒音、残響音、床衝撃音遮断性能について設計内容から検討、設計に反映をし、完成後測定を行いました。また、ライフサイクルコストについては、設計図書、設計書を元に50年のイニシャルコストを試算、CLTの普及の可能性について検討しました。

照明デザインについては：設備設計での照明計画は、世界的に仕事をしている照明デザイン事務所／岡本賢氏（48回卒）の照明計画をベースに設計をしました。特に、外部に現したCLTの表現、配線スペースが限定される場合の照明デザインに重点的を置きデザインしました。

木構造の施工については：開校が4月であったため、難工事であるのに施工期間が短いプロジェクトでした。特に高度な技術が要求される木構造の施工は、社長を始め多くの日大工学部OBが勤務されている株式会社オノツカ（代表取締役／小野塚昇一（18回卒）、専務取締役／小野塚彰宏（機24回卒）、営業課課長／小野塚真規（44回卒）、技術課主任／柳沼哲也（56回卒）、技術課／鈴木朝見（64回卒））が担当され、CLTの発注、施工図の作成、施工管理を行いました。

■持続するネットワーク

以上のように郡山ヘアメイクカレッジ開校までに様々な業務があり、日本大学工学部の先生、OBが協力し合いながらプロジェクトを進めました。日大工学部を前提とした計画にも見えますが、実際はそうではありませんでした。計画を遂行していく上で必要な能力を持つ方々に加わって頂いた所、たまたま日大工学部が中心となったネットワークになりました。福島県、特に郡山市で日大工学部の先生方、OBが地域に根ざして活動をしている証なのかもしれません。OBの卒業回数を見ると18回から64回まで45年以上の世代に渡ります。私自身、日大工学部を卒業、修了して15年以上経ち、繋がりも薄れたように感じていましたが、日大工学部というネットワークは持続しながら広がっていることを実感しました。郡山で設計業務を生業とする私にとって、これからも日大工学部というネットワークと関わりながら地域貢献ができればと思っています。



建築研究会の活動を通して

建築研究会会長 建築学科3年 後 藤 寛 尚

日本大学工学部建築研究会（建研）は、工学部の創立から間もない昭和29年（1954）に発足した、今年で64年目を迎える建築系学生サークルです。

建研の活動の華は何と言っても1年間の成果の披露の場となる北桜祭ですが、それに向けた普段の活動の多くは、サークル全体をいくつかの班に振り分け、それぞれの班で行う形を採っています。

現在の班は、災害対策研究班・空間建築班・都市建築班の3つからなります。以下では建研を具体的に知っていただくため、私が所属する災害対策研究班の活動を例にご紹介します。

災害対策研究班は、①地域防災や②災害時の住環境・③復興デザインについて調べ、考えることを目的に、2年前、当時1年生だった私たちの代が中心となって設立しました。これは「福島県の大学で建築を学ぶ私たちが何をすべきかを考える場をつくりたい」という思いが形となったものです。個人的には、生まれ育った南相馬で東日本大震災（震災、2011）の津波と原発事故に遭った経験が影響しています。

班の活動としては、①地域防災については、昨年まで2年をかけて、学生や周辺住民に対する防災意識の啓発のため、大学周辺に建つ7,000棟の建物の模型にプロジェクションマッピングで各種の災害リスクを落とし込んで視覚化し、危険度の周知に努めました。また、②災害時の住環境については、避難所や仮設住宅の空間的な活用法を、そして、③復興デザインについては、震災被災地を中心に現在進行形の復興の取り組みを調べました。

そうしたことばかりでなく、震災に対してもっと直接的に私たち自身の手でと考え、昨秋より新たな取り組みも始めています。小高復興デザインセンター（南相馬）が行う住民と行政・大学が協働する復興まちづくりの見学を契機に、引き続き市内の高校生とのワークショップ、蔵の有効活用法を考えるなどの形で何度も南相馬に足を運んでいます。

ただ、そうなると私たち学生にとって問題となるのは

資金です。しかし幸い、活動支援プログラム「PNT東北学生支援プロジェクト2016」（公益財団法人 地域創造基金さなぶり）の助成をいただくことができ、「南相馬市小高区の緊急時における避難経路の明確化」の名で調査を継続することができました。

避難指示解除直後の建物の使われ方や災害時の避難経路を歩いて調べ、避難経路地図（逃げ地図）を作り、その結果、都市部と違い小高では避難に車を使うことやコミュニティ避難の限界を知りました。足で歩き、生の声を聴く。まさに百聞は一見にしかずで、講義や本で得た知識とは異なるものでした。

思いがけない発見もありました。ありふれた町と思っていた故郷に、文化的な建物が数多く残っていたことです。著名な建築家が改修を検討したある建物は、結局残されることはありませんでした。それでも、たった1つの建物について様々な立場の人が、保存か解体かを真剣に考える瞬間に立ち会えたことは貴重な経験でした。沢山の人の思いが交錯しながらまち形成されていく、そのことを実感しました。

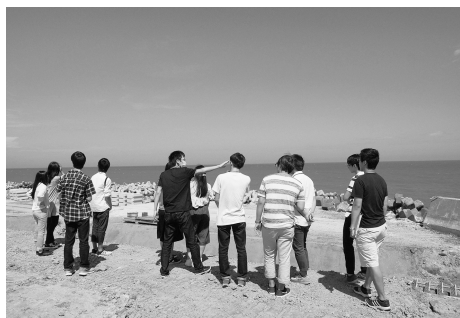
そして、こうした経過の報告のため今年2月に訪れた仙台では、私たちと似た思いを胸に取り組み多くの学生と知り合うことができ、励みになりました。

私たち3年生は、この11月で引退を迎えます。

仲間とともに1つの事にとことん没頭できる環境に感謝しつつ、残り少ない時間を有意義なものにしたい。そしてそれとともに、私たちの後を継ぐ後輩たちの支援を全力で行っていきたいと思っています。

〈建築研究会 北桜祭 展示のお知らせ〉

- 建築研究会：サヴォア邸の空間的研究／子どものまち・いえワークショップ提案コンペ報告／Reプロジェクト
- 災害対策研究班：郡山市防災プロジェクションマッピング／南相馬市小高区の緊急時避難経路の明確化／同区浦尻行政区の復興活動／時間軸と空間軸で考える避難所運営
- 空間建築班：最小空間の研究



被災地沿岸部の視察



小高区まち歩き調査



避難経路地図の検討作業

卒業設計を通して学んだこと

大学院博士前期課程1年 作 山 和 輝

私は、卒業設計の学内講評会において学外展示作品に選出して頂き、2月に行なわれたその展示会において、本年度から創設されたJIA福島地域会賞を賜ったことは大きな喜びでした。また、大学院入学後の5月に、平成28年度卒業設計作品をレモン展（第40回学生優秀作品展）に出展する機会を与えて頂き、普段見ることがない他大学の卒業設計代表作品を間近で見えて意見交換ができたことは、大いに刺激となりました。また、両展示会ともに、尊敬している審査員・講評者の方々から他大学の優秀な学生や賛否両論のご意見やご感想をもらえただけでなく、存外に評価されている事や不十分であった点などを気づかせて頂ける貴重な経験をさせて頂きました。大学院修了後は建築設計職での就職を目指しているので、今後の進路を決定する際の指標としても大きな収穫を得られたと思っています。

私の作品は、電車のモビリティ性を活かし、駅に機能を展開することでまちの賑わいを演出する仕掛けの提案でしたが、本来動かない建築を動かすことに焦点を当てた提案でしたので、上手く考えていることが伝わらない時には、遊びに偏る提案に映り厳しい意見も頂きました。

数多く力作が出展されるコンクールとなると、自分がプレゼンできる時間はわずかで、短時間で自分の考えを的確に説明できる準備が不十分であった点が悔やまれ、普段からそのような経験しておくことの重要性を痛感しました。

また、レモン展で首都圏の他大学の卒業設計代表作品を間近に見て、確かにプレゼンボードや模型の表現力は素晴らしくレベルは高く勉強になる点も多かったですが、彼らと意見交換していると、考えていることはそう大差がない面もあることは少し自信になりました。つまり、モノ・コトバの表現の少しの違いが、数多くの中で引きつける作品となることから、それらの技を磨くことが自分の今後の課題として浮き彫りになったように思います。

私にとって、卒業設計を通しての経験は、現在の大学院での学術研究活動にも影響を与えてくれた大きな財産です。今後もこの刺激を忘れずに活動をしたいと思います。

最後に、粘り強くご指導して頂いた先生をはじめとして、制作にご協力頂いた先・同・後輩の皆さんに、この場を借りて感謝申し上げます。



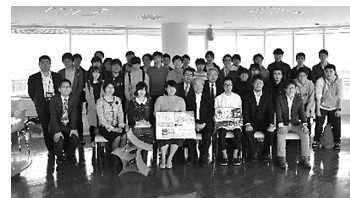
写真左：
郡山駅前で開催された卒業設計展
でのJIA福島地域会へのプレゼンテーション

写真右：
レモン展(第40回学生優秀作品展)
出展風景

第1回桜建デザイン・コンクール2016

OHDeCo巡回展 in 工学部 開催報告

日本大学に所属する建築学科の同窓会組織桜門建築会は、近年在校生を対象とした設計コンペを実施しています。現会長の斎藤公男先生（日本大学名誉教授）は、卒業生にも参加の門戸を拡大させ、「ストラクチャル・アートへの挑戦」をテーマとした「第1回桜建デザイン・コンクール2016」を開催しました。この内容は、斎藤先生が中心となり日本建築学会で行なわれた、アーキニアリング・デザイン活動の流れを汲み、構造デザインの提案、さらに選定作品は実物大模型の制作という、他にはあまり類を見ないデザインコンペです。昨年11月に審査が実施され、OBを含む工学部ブンタラ研有志チーム（Studio-BSG）の作品が桜建会賞を受賞しました。



その巡回展が各部科校で開催され、工学部がそのラストを飾ることとなり、OHDeCo巡回展in工学部が4月11～27日、70号館9階多目的ホールを会場に開催されました。4月15日には、7064教室にて斎藤先生の講演ならびにグランプリと桜建会賞受賞者による発表が行なわれました。グランプリは当時短大2年の女子学生コンビが受賞し、そのアイデアや実物模型完成までのプロセスにおける苦労と楽しみが伝わる、魅力的なプレゼンテーションでした。桜建会賞では、この春卒業した眞船峻君が一つのピースを繋げて増殖させ構造体となる提案を発表しました。最後は斎藤公男先生を囲み、参加者一同で記念撮影を行いました。

新任の先生

非常勤講師 新橋 正博

担当科目：建築施工Ⅱ



本年度より非常勤講師として「建築施工Ⅱ」を担当いたします新橋（しんば）と申します。私は平成3年に日本大学を卒業後、建設会社に就職し、建築現場の施工管理業務（いわゆる現場監督）、技術研究所研究員、中国における建設技術指導を経て、現在は建築施工に関わる技術開発、技術支援等の業務を担当しています。

「建築の生産」とは、企画・設計・施工など、建築物が造られる過程を、工業的な生産過程として位置付けた場合の建築行為の総称です。工場で生産される製品と異なるのは、「手作りの一品生産であること」、「完成までに多くの人々が参画し、時間と労力をかけてつくり上げる」「デザイナーの意図する空間をつくりこむ」ことにあります。一連の建築生産の過程では、専門知識が必要なのはもちろんですが、他分野の参画者の考え方や専門外の情報・知見を吸収し、ものづくりに活かすことが大事になります。講義ではそういった視点から、建築の仕上げ工事から竣工引渡し、建物の維持管理までの流れや施工方法に関わる講義を通じて、地球最大規模のものづくりである建設の楽しさを伝えていきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

非常勤講師 矢野 英裕

担当科目：建築意匠特論・建築計画設計



今年度より着任しました矢野英裕です。私は大卒後、安藤忠雄建築研究所で、主に建築の設計・監理に携わってきました。2年ほど前に独立し、郷里の山形市に戻り、「空間芸術研究所」を設立、建築家としての活動を行っています。

安藤先生のもとで学んだ、建築設計で最も大切なことは、場所や素材のもっている潜在力を引き出すことです。そのためには、まず隠れた魅力を読み解く能力が必要になってきます。地形や都市の文脈を読み解くには、現在という時間の枠を超えて、過去（歴史や考古学）に思いを巡らすことも大切でしょう。そして、見つけた潜在力を目的に合わせて最大限に生かすためには、未来へのヴィジョンを描く力が要求されます。

建築は、科学・芸術を横断する多岐にわたる教養を身につけ、ものごとの本質を瞬時に見抜く直観力・洞察力を研ぎ澄ましなが、部分と全体、そして過去と未来を行き来しつつ、従来にない新しい環境をつくりだすことができる、創造的で面白い分野だと思います。建築学科で学んだ知識や方法は、人間と環境との調和が重視される現代社会を生き抜くための基礎になるでしょう。これからの長い人生をよりよく歩むためにも、今、しっかりと取り組んでほしいと思います。

私も皆さんとともに学んでいきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

非常勤講師 栗原 隆

担当科目：建築設計演習Ⅲ



今年度より建築設計演習Ⅲを担当させていただきます栗原隆です。宜しくお願ひ致します。学部の際は阿部直人先生の設計事務所では2年生の時から働かせて頂き、4年生の設計演習では渡部和生先生のご指導を賜りました。また、大学院の際は横総合計画事務所でも働かせて頂き、着工前から竣工まで福島県男女共生センターの計画に携わるなど、大変良い思い出になっています。夏休みを利用して世界へのお見聞を広めようと各国を巡りましたが、イスラム文化が根付いたトルコやスペイン、モロッコ等の集落調査の渡航中、街角のテレビに突如映し出された9.11の破壊映像の衝撃は今でも忘れられません。卒業後は千葉学建築計画事務所での勤務を経て、横浜市内で建築設計事務所を主宰しております。設計演習では実務的な計画を抑えつつ、新しい設計手法や建築の可能性を学生の皆さんと一緒に見出していけたらと思っていますので、意欲的に創造性に溢れた提案に出逢う事を楽しみにしています。未来を担う皆さんには、様々な体験を通じて建築の奥深さや哲学に触れ、建築の真理を追求し、創造的な建築に夢を見て沢山の専門書から教智を養って欲しいです。日本大学の校章でもある本学部の桜並木の桜のように、どんな時も我慢強く風雪に耐え忍び、苦悶を乗り越え、それぞれの可憐な花を咲かせてください。

非常勤講師 高橋 岳志

担当科目：建築設計演習Ⅱ



今年度から非常勤講師として、建築設計演習Ⅱを担当します高橋岳志です。日本大学大学院工学研究科を修了後、有限会社阿部直人建築研究所に所属し、住宅や店舗、公共建築の設計に5年程携わりました。その後独立し、郡山市で設計事務所を設立しました。独立後は住宅をメインに設計をしていましたが、この数年は消防署やCLT工法を用いた美容系専門学校など公共建築の設計、まちづくりに携わっています。

建築をつくる上では、自身の原風景に加え、体感した建築や街、文化、出会った人、読書、思考などの経験が計画のための糧になると思います。建築設計の領域が広がる現在、そのような経験がより重要です。私自身も経験を蓄えるために国内外の様々な建築、街や文化に積極的に触れるようにしています。6月下旬にはフランク・ロイド・ライトやルイス・I・カーンの建築、レム・コールハースが「錯乱のニューヨーク」で取上げたニューヨークの街を体感してきました。後期から担当する設計演習の授業ではエスキースに加え、私の経験についてもお伝えして建築により興味を持ってもらえればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

- ・齋藤俊克, 出村克宣, 「ポーラスコンクリートの空隙率及び圧縮強度に及ぼす型枠のせき板効果の影響」, セメント・コンクリート論文集, Vol.70, pp.290-296, March 2017.
- ・速水清孝, 「『福島県庁舎』の設計と建設の過程」, 日本建築学会計画系論文集 Vol.82, No.734, Apr.2017, pp.1039-1049.
- ・高橋広大, Sanjay PAREEK, 小澤満津雄, 「バサルト繊維を用いた超高強度コンクリートの基礎性状及び高温時における爆裂抵抗性に関する実験的研究」, コンクリート工学年次論文集, Vol.39, No.1, pp.1117-1122, July 2017
- ・鈴木裕介, 上野拓, Sanjay PAREEK, 荒木慶一, 「超弾性合金の配筋位置によってヒンジリロケーションしたRC梁の構造性能評価に関する基礎実験」, コンクリート工学年次論文集, Vol.39, No.1, pp.1351-1356, July 2017
- ・Akira MATSUDA, Ippei MARUYAMA, Sanjay PAREEK, Yoshikazu ARAKI, REACTION AND RESULTANT PHYSICAL PROPERTIES OF FA-BASED ALKALI ACTIVATED MATERIALS AND GEOPOLYMER CURED AT 80°C, コンクリート工学年次論文集, Vol.39, No.1, pp.2041-2046, July 2017
- ・鹿島大雄, Sanjay PAREEK, 丸山一平, 荒木慶一, 「各種離型剤によるジオポリマーモルタルと鋼板の剥離性状に関する研究」, コンクリート工学年次論文集, Vol.39, No.1, pp.2053-2058, July 2017

発 表 論 文

* 届け出があった記事を掲載

■日本建築学会東北支部研究報告会

日時：平成29年 6月17～18日 会場：文化交流館カダーレ（秋田市）

- ・塩化物イオン固定材を用いた断面修復材料の腐食抑制効果に関する研究 ○岡田明也, 渡辺宗幸, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・ポリマーセメントモルタルの強さ性状に及ぼすポリマー混入率の影響 ○西田 電, 我喜屋宗満, 齋藤俊克, 出村克宣
- ・病院における事業継続計画及び廃棄物処理に関する調査報告 ○青木理久, 森山修治

■速水教授は、東京建築士会機関誌『建築東京』3月号（vol.53 No.3）に「建築士のこれからとこれからの建築士」と題し寄稿された。

■PAREEK准教授は、3月1日、建築研究開発コンソーシアムより、JIS A 1310 建築ファサードの燃えひろがり試験方法 J I S 原案作成委員会委員を委嘱された。

■浦部准教授は、3月17日、福島県双葉郡大熊町新庁舎整備公募型プロポーザル審査委員会委員を委嘱された。

■浦部准教授と浦部研究室が計画・設計に関わった『希望ヶ丘プロジェクト—小規模集落型木造復興モデル群—』が日本建築学会作品100選に選出され、3月20日発行の作品選集2017に掲載された。

■長谷川周平君（H28年度卒業生・浦部研）の卒業設計「保原駅・前文化と生業がつくる連続体」が、3月28日、J I A 東北学生卒業設計コンクール2017の優秀賞を受賞し、6月24日の全国学生卒業設計コンクールに出展した。

■菊地智志君・今泉花梨さん・吉田真奈美さん（市岡研4年）が、NPO法人ふくしまユニバーサルデザインと協同して作成した「ユニバーサルデザインなるほどガイド」が3月に完成した。

■日本建築学会東北支部平成29年度役員に、代議員千葉教授、常議員堀川助教が当選された。

■市岡専任講師は、4月4日、会津若松市より、本庁舎保存活用計画及び庁舎整備行動計画作成等業務委託プロポーザル選考委員会委員を委嘱された。

■渡部特任教授が設計した『コートローレル・にしくば診療所』が、4月5日発行のART BOXインターナショナル「店舗・施設の工事（保存版）」に掲載・収録された。

■森山教授は、4月21日、韓国ソウル消防本部にて「日本における超高層ビルの煙制御設計と方向性」と題して講演された。

■PAREEK准教授は、4月21日、International

Union of Testing and Research Laboratories for Materials and Structureより、RILEM TC SHE: Self-healing concrete - Its efficiency and evaluation委員会委員を委嘱された。

■森山教授は、5月24日、東京理科大学より、平成29年度東京理科大学研究推進機構会議外部評価委員を委嘱された。

■PAREEK准教授は、5月25日、一般社団法人建築・住宅国際機構より、ISO/TC92/SC1WG Life-threatening components of fire - Guidelines for the estimation of time to compromised tenability in fires委員会委員を委嘱された。

■市岡専任講師は、5月26日、福島市より、福島市景観審議会委員を再度委嘱された。

■浦部准教授と浦部研究室が計画・設計に関わった『針生ほしっぱの家』が、5月28日、第12回木の建築賞（やま・もり再生賞）を受賞した。

教室ニュース

■市岡専任講師は、5月28日に開催された「福島県における復興記念公園シンポジウム～公園から福島の再生を考える～」において、パネルディスカッションのパネラーとして登壇された。

■森山教授は、5月31日、郡山地方広域消防組合より、郡山地方広域消防組合行政不服審査会委員を委嘱された。

■PAREEK准教授は、6月1日、郡山市教育委員会より、郡山市図書館協議会委員を委嘱された。

■森山教授は、6月2日、一般社団法人石膏ボード工業会より石膏ボード賞（特別功労賞）を授与された。

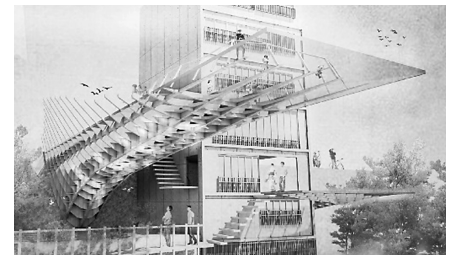
■6月4日に発表された全国陶器瓦工業組合連合会主旨の第4回賞賛学生アイデアコンペティションにおいて、福田晴也君・

柳沼明日香さん（浦部研4年）・森泉友希君（渡部研4年）の作品「時の積層 都市の記憶にオアシスを」が佳作入選した。



■浦部准教授は、6月12日、それまでに行なわれた国・県・村・大学・市民が議論する「かつらおサークルミーティング」代表として、『かつらおビジョン』を取りまとめ葛尾村長に上申した。

■6月17日に行なわれた、日本建築構造技術者協会東北支部主催の構造デザインコンテストく学生の部において、漆原秀明君（浅里研M2）・我妻佑磨君（浦部研M2）・海老澤奈苗さん（浅里研4年）の作品「多様化する集積梁—敷地の要素から組み立てる—」が、最優秀賞と最多得票賞を受賞した。



■渡部特任教授は、6月20日、福島県より、福島県建築文化賞の審査委員を再度委嘱された。

■土方准教授は、7月11日、福島市より、あぶくまクリーンセンター焼却工場再整備事業検討委員会とあぶくまクリーンセンター焼却工場再整備事業基本構想策定事業者選定審査委員会委員を委嘱された。

平成29年7月1日現在

教授	淺鈴	里木	和	茂晃	鋼建	構	造	16号館	1階	106	(956-8734)
教授	千出	葉村	正克	裕宣	建	築	画	45号館	2階	205	(956-8741)
教授	濱速	田水	幸清	裕宣	建	築	学	16号館	2階	204	(956-8733)
教授	ブン	タ	S.	G.	建	築	学	9号館	1階	114	(956-8740)
教授	森	山	修	治生	建	築	史	16号館	3階	310	(956-8752)
教授	渡浦	部内	智英	義治	建	築	造	9号館	3階	310	(956-8872)
教授	野	S.	N.	ク	建	築	備	16号館	2階	206	(956-8735)
教授	土市	方	吉	雄子	建	築	計	16号館	3階	311	(956-8751)
教授	斎	岡	綾	克巧	建	築	画	45号館	3階	301	(956-8750)
教授	日堀	野	川	之	建	築	学	9号館	3階	309	(956-8743)
教授	宮山	崎	真	弘	建	築	学	16号館	2階	207	(956-8744)
教授					建	築	画	9号館	1階	102	(956-8747)
教授					建	築	画	45号館	3階	304	(956-8742)
教授					建	築	学	45号館	3階	305	(956-8746)
教授					建	築	学	9号館	1階	114	(956-8740)
教授					建	築	学	16号館	2階	204	(956-8733)
教授					建	築	学	16号館	1階	106	(956-8734)
教授					建	築	学	45号館	2階	205	(956-8741)
教授					建	築	学	9号館	3階	310	(956-8872)

兼 担 教 授	根 上 彰 生	地 域 計 画 特 論	45号館	3 階	304	(956-8742)
兼 担 教 授	石 田 壽 一	建 築 職 業 倫 理 特 論	16号館	3 階	310	(956-8752)
兼 担 教 授	宇 都 宮 雅 一	建 築 職 業 倫 理 特 論	16号館	3 階	310	(956-8752)
兼 担 教 授	熊 倉 洋 介	建 築 設 計 計 画 特 別 実 習	9 号館	3 階	309	(956-8743)
兼 担 教 授	濱 尾 博 文	建 築 構 造 設 計 特 別 実 習	16号館	1 階	106	(956-8734)
兼 担 教 授	三 浦 金 作	都 市 計 画 特 論	45号館	3 階	304	(956-8742)
兼 担 教 授	米 田 正 彦	建 築 職 業 倫 理 特 論	16号館	3 階	310	(956-8752)
兼 担 教 授	矢 野 英 裕	建 築 意 匠 特 論	9 号館	3 階	310	(956-8872)

[illegible]

教 室 事 務 小 林 まゆみ 建 築 学 科 セ ン タ ー 16号館 3階 309 (956-8730)